◆『アジア・キリスト教・多元性』第５号をお届けします。

この研究雑誌は、研究会「日本･アジアのキリスト教と宗教的多元性」（通称、「アジアと多元性」研究会）の一年間の活動報告として刊行されてきた。第５号ということからもわかるように、本研究会の活動も５年が経過したことになる。継続的に雑誌が刊行できたことについて、今回論文を執筆いただいた方々、またほかの研究会メンバーの方々にお礼を申し上げたい。

◆ 2006 年度の研究会の活動については、本号の「研究会の活動内容（2006 年度）」あるいは研究会のホームページをご覧いただくことにして、ここでとくに述べておきたいのは、本研究会がこれまで密接に関わってきた、「多元的世界における寛容性についての研究」（＝寛容性研究会、京都大学 21 世紀ＣＯＥプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」内の研究班）が、その５年間の活動を終了したことである。その研究成果の一端は、『多元的世界における寛容と公共性―東アジアの視点から―』（晃洋書房）において報告されている。この報告書には、本研究会の５人のメンバーの論文なども掲載されているので、ご関心のある方はぜひご覧いただきたい。こうした本研究会とＣＯＥ研究会との関わりは、昨年刊行の『比較宗教学への招待―東アジアの視点から―』（晃洋書房）においても、確認いただけることであるが、ＣＯＥ研究会の活動の終了は、本研究会にとっても大きな区切りと言える。今後は、国内外の研究機関や研究者との交流も視野に入れながら、新たな研究活動の展開を試みてゆきたい。とくに、海外の研究者による英文論文の受け入れについても検討したい。

◆本研究会は、研究会メンバーそれぞれの個人研究の発表の場であるとともに、共同研究の様々な具体化を目指し、年度末の研究雑誌『アジア・キリスト教・多元性』の刊行を軸に活動を進めてきている。このような研究会活動は 2007 年度も基本的に継続する予定であるが、前号の「あとがき」でも指摘したように、今後は、個々人の個別的な研究を集積するだけでなく、共通のテーマに関わる共同研究についても取り組んでゆきたい。これは、アジアのキリスト教あるいは宗教をめぐる研究は、きわめて多岐にわたる広範な問題連関を含んでおり、一定規模の研究者集団による共同研究として行われるべきものであるとの認識に基づいており、まさに本研究会の目的は、こうした共同研究の場となることだからである。本研究会の代表としては、『比較宗教学への招待―東アジアの視点から―』（晃洋書房）の内容をさらにレベルアップするような共同研究を提案したい。具体的には、「東アジアのキリスト教」についての歴史的思想史的観点からの研究と、「宗教的多元性」についての理論的な研究である。いずれ、研究会において相談したいと考えている。肝心なことは、研究会メンバー各自の研究の活性化であって、本研究会としては、それに相応しい場が提供できるよう、いっそうの充実を期したい。アジアと日本のキリスト教、宗教的多元性といったテーマに関心のある方は、ぜひわたくしたちの研究会に参加いただきたい。

◆今後とも、本研究会のために、各方面からのご協力をいただければ幸いである。

2007 年 3 月

研究会代表
芦名　定道